

冬山合宿報告書

1967年度

12月20日

田口 12:30 — 池の平 1:10 ~ 1:25
河原眼すぎで汽車に遅れる。裏とは池の平入口で
落ちる。スキー場は雪が少なくスキーヤーも少な
い。遅れを取りもどさんとリフト代をふんはつす。
最初に我々は深雪と戦う前にドロコにいと
まなければならなかった。南地獄谷から引いて
ある温泉筋のため雪が解けてほろためである。
結局扇の要領となる。

21日(2日目)

雪が少ないため夏道を大谷ヒュッテへと行く。大雪
ならとも通れる法はない。トラバース道だ。小屋を
過ぎるころから豪雪地帯の本頂まで。雪も積も
までのラッセルとなる。鎖場の手前で古いトレ
でたよりすぎ。高度にして50Mほど。時周に17/時周
などの損失となる。もどつた所でワカンをつける。
鎖場でフィックスして通過すると雪は増々深くなる。
ダブルホックの事を考えたりする。長助池まで
の予定はとても無理で。頂上直下100Mの所で
その日のぬぐりとす。この調子を予想外に時
間をくいてす。

起床 4:45 — 出発 7:25 — 大谷ヒュッテ
8:20 ~ 40 — 天狗堂 10:40 — 鎖場 1:00
~ 3:00 — TS 3:40 就寝 22:15

22日(3日目)

起床 7:35、出発 10:30 — 妙高岳頂上
10:55 ~ 11:05 — 長助池 1:15 ~ 50 —
大倉のコル 3:35 ~ 50 — 黒沢小屋 4:40
妙高の上は長い尾根状で、北山峰と南山峰とが
ある。長助池にはこのコルから下りはじめ。途中
河原が10Mほど滑る。本人より他の者の方がヒッ

クリしている「ダンゴ」になつたアイセにて氷った雪の上に乗つたので滑つた。そのうち止まるた35と待つていたが止まりなないのでピッケルを打込んだと本人はしごくノキなものである。大倉のゴルへの登りは沢の中なので雪がいろいろ深く苦しむ。今日風が3強く疲労もはげしく黒沢小屋留りとする。小屋の入口は無残にも74にぬされていた。

23日(4日目)

起床 5:00、出発 10:00 — 高谷池 1:15

風雪強くしほらく天気の状態をみる。

意を決し高谷池までと出発する。

なんの変てつもないうるやかなだつ広い尾根をあい変らずの猛ラッセルで高谷池小屋につく。小屋もこのぐらゐホロたど無断使用も罪の意識が起らず気がらくだ。外は猛烈な吹雪だ。湿っぽい布団をたふぶりかぶつてゐる。

24日(5日目)

風雪強し沈殿

25日(6日目)

起床 5:45、出発 9:00 — 火打丁頂上 2:30

— 高谷池小屋 4:45

一日の沈殿で雪は増々深くしかも重い。まるで塹壕を掘りながら進むよるなので遅々として進まない。1時間たつたところで「一本折」なんとまた300Mと進んでない。こんな調子ではどこまでいけるかわかつたものではない。尾根に出たころから風雪強くなる。結局深い雪と残りの日程。出発前田焼山が地鳴しているから中止するという系魚川置の警告とから、これ以上は無理と判断。空身で火打を叩きつけて小屋にもどることとする。丁頂上直下は頭も没するほどでピッケルで崩し崩しやつと頂上にでる。

26日(7日)

出巻 8:200 — 黒沢の橋 4:45

笹ヶ峰への下口でほん少し間違え、すぐに気付がXンドクセイとはかりにそのまま下りた。雪の深いこと深いこと、ホカッと吹たまりに落ち込んだ。最後、出口はほのか頭上である。それを何度も何度もくりかえし沢すじに出たところはパンツまでびしょぬれである。そしてこれからが大変であった。やがてところどころに氷の流れが現われ、我々も沢の中を凍みなく斜面を降りた。雪は溜って重いが、西日の当る急斜面は死の恐怖感さえヒシヒシと感じせず、そんな所を3.4ヶ所通過し、フワフワの状態を黒沢の橋にテントを張

27日(8日)

今日は上田に帰る。やはりうれしい。山に来て一番うれしいのが帰る時とは……

笹ヶ峰ではどこかの某山楽会らしいのがスキーをやっている。我々どおれほど苦しめた深雪もどこかえやら妙高スキー場は風に枯草がながきリフトも動いていない。下の方の小さな斜面で南西弁の女子学生たちの謹修会が守られていた。

春山合宿報告

3月16日(1日目)

上田 6:07 — 伊那大島 10:27 ~ 12:25 —
港合 1:45 — 鹿塩 2:35 — 入沢井 3:50
TS 4:10

北の上田に比べ緑の多い伊那谷を電車で春の日ざしをあびて大島へと向う。広河原行の bus に乗り港合にて下車。入沢井部落に入ると腰にメタを付けた土地の者が「道は崩れていなくなった」と我々に聞く。こんな山奥では道一本に生活の全てがかかっているのだ。このころ雨降となる。部落を外れた所に小さな岩小屋を見つけここに荷をおく。ねぐさは田の中のワラ小屋を見付るところはいい。

3月17日(2日目)

出発 6:45 — 榊沢小屋 7:00 — 塩川小屋
8:10 — 尻根へのりとりつき 9:15 — TS 3:15
霽快晴三伏小屋までいかんとしついで上げ
るも重荷に峠下30分の所でダウン
ある小屋での読書

山にはのぼるものにくるものはない

3月18日(3日目)

出発 6:10 — 峠の小屋 6:45 — 本谷山
8:05 — 塩見岳 12:00 ~ 15 — 小屋
3:50 — 帰幕 4:10

テントから首を出すと北に丈仙が、峠に出ると目前に塩見、南に悪沢、荒川が見える。権石衛門をぬけると駒、北、南の岳が手に取るように近い。塩見の最後のつめは、いやなうらやまの岩と雪像が悪いのと合まってかなりキツイ。頂上に出るとほ
たつよき 雪 旗

大モリ、みごと石"やほり亭エは日本一の山だ"
目を180°回転すると 中央、北のルアスが全
望できる、妙高、灯台も見えるすぐそことわかるぞぞ
18日(4日)

昨日: 帰幕より河原腹痛を起し何も食わ
ず、調子を見るため沢殿とす。雪の上にポン
キヨを払い立てる為、真前に木曾駒の4巻
置じきカール、左に恵那山が見える。

20日(5日)

発発 6:30 — 小河内岳 1:50

出発の時 恵那山を乗り越しはじめアス雲
が、小河内岳に着くころは、雪は伊那谷を
越え我々の足元におよび、風強くなる
小河内岳の避難小屋 留りた。

21日(6日)

沈殿

22日(7日)

出発 7:10 — 大日影山 9:30 —

高山裏 12:10 ~ 30 — TS 2:55

4時起床 昨日からの風はやまず、外は霰
雨だ、6時ころ風がおさまる、上空は
高層雲が浮き、伊那谷は雪でうまってる
三峠山の霧山のみが顔を出し、他はみな
雲の中だ、特に洋上に浮ぶ、氷山のこぼ
穂高がみじか

意を決しナイセンを付け出したが、7時、雪
がくっついてるので、すぐにワカンと変える、しかし
気温高く、雪の積はひどい、ボカスカ落ち、
穴との単行だ、板屋岳をまくあたりは氷った
雪の上に軟雪が30cmほどあり、苦労する
高山裏からは夏丘を通らさず、一息に直上する
出たピークを少し下った所に天幕をはず。

23日(8日)

出発 6:30 — カール 7:15 — 前岳 9:55

中岳 10:40 — 大聖寺平 12:20 — TS 1:20

10分で尾根の最低コルに出る、ここよりトラバースして前岳から出る二本の尾根の間に出る、ここを快適にアイゼンをきかして登る最後は左側の尾根にとりつく、うかつな雪ともろい岩は重い荷がなくともいやだ、ステップをきかみきかみ二本の尾根の合致点に出る、前岳までには3つの岩峰がある、雪の状態もいいので北傾りをまいて中岳との中腹に出る、出発直後から溶ってきた雪がついにまわりじゆを取りかこんでほり溜さ山のみがホツカリと頭を出している、寒派兵をあきらめ前岳より出る尾根を、アイゼンがかかりやすくなるほどのがし尾根だ、テンドウ決した所で真白な雁鳥夫婦の歓迎をうく、

24日(9日)

風雪強し沈殿、思えば昨日と今日は我が校の入試だ、みんながんばれ
高慢な小ヤスラした俺たあも3年前は純情な後馬喰生たつたのだ、

ラーメン食器山盛り、干パン4枚、紅茶1/2
4パティー5枚、刀×3粒、野菜炒り1皿
紅茶食器1皿、ラーメン1杯、食パン2

3月25日(10日)

出発 11:10 — 小赤石 11:40 — 赤石岳
12:05 — 帰幕 1:05

3月26日(11日)

下れる尾根を又も向達える、雨と10数回の徒渉で全身スグヌシ、5時ごろフラフラで小笠湯の所にテントを張る

3月27日(12日)

飯田馬Rにて葉、杉本は北へ、河原は南へとわかれた